

群馬県吾妻郡東吾妻町唐堀C遺跡における 縄文時代前期の配石遺構について

— 発掘調査報告書補遺 —

高 島 英 之

(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

はじめに

1. 唐堀C遺跡から検出された縄文時代
遺構の概要

2. 唐堀C遺跡から出土した縄文土器の概要

3. 検出された配石遺構について
おわりに

—— 要 旨 ——

2018年度に発掘調査された唐堀C遺跡2・3区から検出された計14箇所の配石遺構については、そのいずれにも掘方や石下の土坑などの下部構造が全く検出されず、また、同遺跡が、元来、地山に自然礫を多量に含む土壌の場所に立地しているために、遺構確認面上の自然礫である可能性も濃厚に考えられたため、2021年3月に刊行された発掘調査報告書には敢えて遺構として掲載することを控えたところであった。

しかしながら、その一方で、遺構である可能性も否定しきれないところもあるため、ここに調査記録を公開し、記録保存の責を果し、以て、同時期における類似遺構を検討・考察する上での材料を提供したいと考える。

キーワード

対象時代 縄文時代前期

対象地域 上野国吾妻郡

研究対象 配石遺構

はじめに

唐堀C遺跡は、北を吾妻川、東を温川に囲まれた河岸段丘の最下位段丘面上に立地する縄文時代前期及び古墳時代後期～平安時代中期の集落を中心とする遺跡である。

この遺跡は、上信自動車道吾妻西バイパス建設工事に先立って、2016年度と2018年度に当事業団が18,201.820㎡を発掘調査し、2019年度から2020年度にかけて整理を行い、2021年3月19日に発掘調査報告書を刊行し、発掘調査に関わる事業を完了した。発掘調査の結果、縄文時代前期中葉の竪穴建物建物1棟、古墳時代後期～平安時代中期を中心とした竪穴建物建物38棟からなる集落と、中近世を主体とする集落と耕地等が検出された。畑など、耕作地としての生活の痕跡は存在するものの、人々の生活の根拠である集落を構成する竪穴建物の検出棟数は、調査面積に比して必ずしも多くはなく、人々の居住地の中心部はより安定的に平坦地が確保できる場所に存在し、集落の周縁に当たる部分が検出されたものと考えられる。

平成28年度に発掘調査された本遺跡2・3区から検出された計14箇所の配石遺構については、そのいずれにも掘方や、石下の土坑などの下部構造が全く検出されず、また、同遺跡が、元来、地山に自然礫を多量に含む土壤の場所に立地していることもあって、遺構確認面上の自然礫である可能性が濃厚に考えられたため、発掘調査報告書編集担当者の判断により、2021年3月に刊行された発掘調査報告書には敢えて遺構として掲載することを控えたところであった。しかしながら、その一方で、依然として、遺構である可能性を完全には否定しきれないところもあるため、ここに調査によって得られた記録を公開して記録保存の責を果し、以て、同時期における類似遺構を検討・考察する上での素材を提供したいと考える。

なお、ここでは、発掘調査報告書に掲載しえなかった縄文時代前期と考えられる配石遺構の概要について、報告書の補遺としてごく簡単に触れるので、本遺跡の発掘調査の詳細及び検出遺構全体像については、2021年3月19日に当事業団より刊行した『公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団報告書第678集 唐堀C遺跡-上信自動車道吾妻西バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』を参照されたい。

また、当該発掘調査報告書において、縄文土器の分類、実測、観察、年代観の認定及び考察分担執筆等は当事業団資料部関口博幸上席調査研究員によるところであり(第4章第5節「縄文土器について」、pp.341～346)、また、石器の観察は同じく当事業団資料部松村和男専門調査役に拠るところである。小稿における縄文土器に関する記述は、発掘調査報告書における関口氏、また、石器に関しては松村氏の記述に全面的に依拠していることを予めお断りしておく。ただし、小稿全体の文責は、筆者

が全面的に負っていることは言うまでもない。

1. 唐堀C遺跡から検出された縄文時代遺構の概要

本遺跡の平成26年度の発掘調査は、4月1日から11月30日にかけての9箇月間、調査班1班、調査担当者2名の体制で、1～3区8,524.51㎡を対象に実施した。また、平成30年度の発掘調査は、平成30年7月1日から11月30日までの5箇月間、3区の東側に隣接する4区9,677.31㎡を対象に実施した。検出された主な遺構は、縄文時代前期中葉の竪穴建物1基、土坑54、古墳時代後期～平安時代中期の掘立柱建物1棟、竪穴建物38棟、ピット77基、中近世畑5箇所、中近世竪穴状遺構2基、溝8条、土坑229基、ピット313基等である。

縄文時代の遺構は、As-Kk層もしくはAs-B層下の僅かに暗色味をおびた部分、もしくはローム上面まで掘り下げて確認することが出来た遺構で、古墳時代後期～平安時代中期の遺構と殆ど同一レベルにて検出された遺構も少なからず存在している。

1区からは縄文時代の遺構・遺物の検出・出土は皆無、2区からは土坑4基、3区からは縄文時代前期中葉の竪穴建物1棟、土坑50基及びピット5基などが検出された。縄文時代のものと考えられる遺構の殆どは3区からの検出である。4区では、古代・中世の遺構と表土などから縄文時代の遺物が出土しているものの、縄文時代の遺構は全く確認することが出来なかった。なお、2～4区では縄文時代の遺物包含層(暗褐色土層で、径1mm以下のテフラと思われる微細な白色・黄色粒子を含み、下層では径20mm以上の軽石が集中して堆積する箇所があり、As-YPの可能性あり)から多くの遺物が出土している。

本遺跡から検出された唯一の縄文時代の竪穴建物である9号竪穴建物は、長径約6m、短径約5m、深さ0.5mの規模で、南北に長い楕円形状を呈している。北西側から南東に向かって緩やかに傾斜する斜面が、南東側に急激に落ちていく傾斜変換点付近に掘りこまれているため、後世にかなり削平されていた。炉は、主体部の床面のほぼ中央からやや北東寄り自然礫が多く検出されたので、この周囲に炉が存在していたものと推測されるが破壊されており、竪穴建物中央部からやや西寄りの範囲にまで散乱した状態で検出された。なお、これらの自然礫のいずれにも被熱された痕跡を確認することが出来なかった。この竪穴建物から出土した土器は、いずれも縄文時代前期中葉の諸磯a式のものである。

2. 唐堀C遺跡から出土した縄文土器の概要

本遺跡から出土した縄文土器の総点数は1,772点、総重量は28,997gであった。小破片で、縄文土器であることは確実であるが、無文や磨滅等の原因により、時期及び型式判別が出来なかったものは662点で、本遺跡出土

縄文土器全体の約37%を占めている。

調査区別にみると、3区からの出土が最も多く、1,309点と総点数の約3/4を占めている。次いで4区の312点、2区の148点である。3区からの出土点数が最も多い点は、縄文時代の遺構が3区に最も多い点と一致する。4区で縄文時代の遺構・遺物が少ないことが判明した。特に、晩期の土器はわずか10点であった。

時期別にみると、早期、前期、中期、後期、晩期の土器が継続して出土しているが、点数からみると、前期が650点で最も多く、次いで前期が375点、中期、後期及び晩期の土器はいずれも50点以下であった。前期の土器は、前期の遺構が集中する3区からその約2/3が出土している。

また、型式別に分類すると、早期の押型文系から晩期の浮線文系までの土器が出土しており、早期から晩期まで数千年間にわたって人間の営みが断続的になされていたことが判明する。このうち、早期の条痕文系と前期の黒浜式から諸磯a式の土器が多く、この二時期に人間の営みのピークが存在していたと考えられる。

調査区別には、出土した縄文土器の大部分が3区からの出土である。3区は、吾妻川右岸の段丘崖に面し、西側の2区や東側の4区よりも標高がやや高い微高地状の河岸段丘地形であり、早期・前期の土器が多く出土し、前期の遺構も検出されている。このことから、3区のような微高地状の地形を選んで早期の条痕文系と前期の黒浜式・諸磯a式の2回の時期に活発な人間の営みが存在していたことが読み取れる。特に、諸磯a式の時期には3区を中心にして竪穴建物や土坑、配石などの遺構も構築されており、居住の痕跡が色濃く残されており、この時期に集落が形成されていたものと考えられる。

一方、本遺跡4区のすぐ東側には縄文時代後期から晩期の唐堀遺跡が隣接する。4区では後期・晩期の遺構は検出されず土器も極めて少なかったことから、唐堀遺跡において検出された集落は、本遺跡の所在する西側までは広がっていなかったものと考えられる。

(1) 早期

押型文系、沈線文系、条痕文系、上林中道南式、槻木式、鵜ヶ島台式が出土している。このうち条痕文系が最も多く344点で、早期全体の約90%以上を占めており、それらの大部分が3区から出土している。押型文系や沈線文系、鵜ヶ島台式は10点以下で、上林中道南式、槻木式も少量ながら出土している。また、下荒田式の可能性があるものもあった。

(2) 前期

関山Ⅱ式、有尾式、黒浜式、諸磯a式、諸磯b式、諸磯c式、十三菩提式、松原が出土している。このうち諸磯a式が329点で前期全体の約51%を占め、黒浜式が200点・約31%でそれに次ぐ。諸磯b式は27点・約4%で、諸磯c式は僅か1点の出土に過ぎない。また、前期末葉

に比定される松原が56点と比較的多く出土している。すべて4区からの出土である。黒浜式は2区と3区から多く出土し、諸磯a式は大部分が3区からの出土で、ほかに2・4区からも少量ながら出土している。

前期は、黒浜式から諸磯a式の時期でピークとなり諸磯b式以後は急減している。

(3) 中期

阿玉台式、焼町類型が出土しているが、いずれも10点以下と少量である。この他、型式判別できなかった中期の土器が4区から出土している。

(4) 後期

堀之内1式、堀之内2式、加曽利B式が出土している。加曽利B式は3・4区双方から出土し、堀之内1式は主に4区から出土している。この他、型式判別できなかった後期及び後期後半の土器が主に4区から出土している。

(5) 晩期

浮線文系がいずれも2区から2点出土している。このほか、型式判別できなかった晩期及び晩期後半の土器が出土している。

3. 検出された配石遺構について

検出された配石遺構は2区2面から1基と3区2面から13基の計14基であった。いずれも2面からの検出である。各配石遺構の年代を明確に示すような土器を伴っていないため、年代を明確に絞り込むことは出来ないが、周辺遺構や遺物包含層から出土した遺物の状況や検出面、遺構下の地山の堆積状況等から、これらの配石遺構は、いずれも縄文時代、それも前期のものと考えられる。

2区からただ1基検出された14号配石遺構は、2区の北西隅の小調査区からの検出である。この小調査区からは、他の遺構は全く検出されなかった。

それ以外の13基はいずれも3区からの検出であった。先述した通り、3区は縄文時代の遺構が最も多く検出され、縄文時代の遺物が最も多く出土した調査区であり、配石遺構が3区にほぼ集中していることは、他の縄文時代遺構との兼ね合いから見ても、自然な現象であると考えられる。

2区では、13基の配石は、調査区の中央から南側にかけて、広い平坦面が形成されている範囲に分布しており、北寄りや東寄りの、傾斜地からは1基も検出されなかった。

なお、配石下地山の土層は、Ⅲ層：縄文包含層、Ⅳ層：漸移層、Ⅴ層：ロームである。

(1) 1号配石遺構(第3・11図、写真1)

位置：3区南東隅付近、2号配石遺構の南東側に隣接し、3号配石の東側に位置する。X=61795～798・Y=-94725～733。

構成する石の大きさ：長径0.08～0.43m、短径0.04～0.34m、厚さ0.04～0.15m。

所見：長径0.43m・短径0.34m・厚さ0.15mの隅丸長方形の石を中心に大小の自然礫35個が東西7.75m、南北3.21mの範囲に、ややランダムに、ほぼ楕円形状に配されている。掘方や土坑等の、配石下の下部構造は検出されなかった。

遺物：石製品1点、完形の粗粒輝石安山岩製石皿(1、報告書p330、第202図1)。

(2) 2号配石遺構(第4・11図、写真2)

位置：3区南東隅付近、1号配石遺構の北西側に隣接し、3号配石遺構の北東側に位置する。X=61798～811・Y=-94730～744。

構成する石の大きさ：長径0.10～0.52m、短径0.04～0.38m、厚さ0.07～0.51m。

所見：中央部を9号竪穴建物に破壊されているが、東西13.44m、南北13.08mの範囲に大小の自然礫41個がランダムに、ほぼ楕円形状に配されている。面積的には本遺跡最大規模の配石遺構である。掘方や土坑等の、配石下の下部構造は検出されなかった。

遺物：石製品2点。1点は粗粒輝石安山岩製石皿片(2、報告書p330、第202図3)。もう1点は完形の変質蛇紋岩製磨製石斧(3、報告書p331、第203図5)。

(3) 3号配石遺構(第5・11図、写真3)

位置：3区中央の南端付近、2号配石遺構の南西側に隣接する。X=61795～801・Y=-94737～747。

構成する石の大きさ：長径0.01～0.57m、短径0.05～0.28m、厚さ0.04～0.34m。

所見：東西10.55m、南北6.49mの範囲に大小の自然礫49個がランダムに配されている。北西隅部に礫が比較的集中した箇所があり、東側では礫は散在している。掘方や土坑等の、配石下の下部構造は検出されなかった。

遺物：石製品4点。粗粒輝石安山岩製磨石2点(4・5、報告書p331、第203図6・7)。粗粒輝石安山岩製石皿2点(6・7、報告書p331、第203図8・9)。

(4) 4号配石遺構(第6図、写真4)

位置：3区中央部、やや南寄りの位置。3号配石遺構の北西側、11号配石遺構の東側に隣接する。5号配石の南東側、6・7号配石の北東側に位置する。X=61801～810・Y=-94748～755。

構成する石の大きさ：長径0.10～0.46m、短径0.04～0.32m、厚さ0.02～0.19m。

所見：東西9.03m、南北6.94mの範囲に大小の自然礫26個がランダムに散在している。掘方や土坑等の、配石下の下部構造は検出されなかった。

遺物：なし。

(5) 5号配石遺構(第7図、写真5)

位置：3区中央部、やや北西寄りの位置。4号配石遺構の北西側、11号配石の北側に位置する。X=61814～819・Y=-94752～759。

構成する石の大きさ：長径0.11～0.39m、短径0.06～0.32m、厚さ0.05～0.15m。

所見：東西7.02m、南北4.50mの範囲に大小の自然礫19個が北西端、北東端、南端のほぼ3グループを構成し、その間にランダムに小礫が点在している。

遺物：なし。

(6) 6号配石遺構(第7・11図、写真6)

位置：3区中央部、やや南西寄りの位置。11号配石の西側、7号配石の北東側に隣接する。9号配石の南東側に位置する。X=61805～806・Y=-94762～766。

構成する石の大きさ：長径0.14～0.56m、短径0.05～0.46m、厚さ0.06～0.20m。

所見：東西4.18m、南北3.26mの範囲に大小の自然礫12個がランダムに配されている。10～13号配石よりはやや規模は大きい。本遺跡では小型の部類の配石遺構の一つである。掘方や土坑等の、配石下の下部構造は検出されなかった。

遺物：粗粒輝石安山岩製石皿1点(8、報告書p331、第203図10)。

(7) 7号配石(第8・11図、写真7)

位置：3区の南西寄り。6号配石のすぐ南側、8号配石のすぐ東側、13号配石のすぐ北側に隣接する。X=61798～804・Y=-94763～776。

構成する石の大きさ：長径0.08～0.34m、短径0.07～0.24m、厚さ0.03～0.17m。

所見：東西12.68m、南北7.18mの範囲に大小の自然礫41個が雁行状にランダムに散在している。2・9号配石と共に本遺跡では小型の部類の配石の一つである。掘方や土坑等の、配石下の下部構造は検出されなかった。

遺物：縄文土器諸磯b式深鉢口縁部片(9、報告書p324、196図62)、粗粒輝石安山岩製磨石1点(10、報告書p331、第203図11)、粗粒輝石安山岩製石皿1点(11、報告書p331、第203図12)。

(8) 8号配石(第9図、写真7)

位置：3区の南西寄り。7号配石のすぐ西側に隣接する。12号配石の南側に位置する。X=61797～800、Y=-94776～781。

構成する石の大きさ：長径0.07～0.44m、短径0.04～0.29m、厚さ0.03～0.14m。

所見：東西4.87m、南北3.29mの範囲に大小の自然礫28個が比較的小コンパクトに配されている。2・9号配石と共に本遺跡では小型の部類の配石の一つである。掘方や土坑等の、配石下の下部構造は検出されなかった。
遺物：なし。

(9) 9号配石(第9図)

位置：3区の北西寄り。6号配石の北西側、12号配石の北東側、10号配石の南東側に位置する。X=61810～817、Y=-94771～776。

構成する石の大きさ：長径0.09～0.40m、短径0.04～0.26m、厚さ0.06～0.17m。

所見：東西7.74m、南北7.62mの範囲に大小の自然礫15個が、中央付近には集中し、それ以外の場所には散在して配されている。平安時代前期の2号竪穴建物に大きく破壊されているため、全容は不明である。掘方や土坑等の、配石下の下部構造は検出されなかった。

遺物：なし。

(10) 10号配石(第10図)

位置：3区の北西寄り。9号配石のさらに北西側に位置する。X=61816～820、Y=-94781～783。

構成する石の大きさ：長径0.11～0.29m、短径0.04～0.24m、厚さ0.04～0.13m。

所見：東西1.80m、南北3.79mの範囲に大小の自然6個が散在して配されている。掘方や土坑等の、配石下の下部構造は検出されなかった。

遺物：なし。

(11) 11号配石(第10図・写真8)

位置：3区の中央。4号配石の西側、5号配石の南側、6号配石の東側に位置する。X=61807～808、Y=-94758～760。

構成する石の大きさ：長径0.22m・0.45m、短径0.15m・0.25m、厚さ0.09m・0.19m。

所見：東西1.14m、南北1.92mの範囲に大小の自然礫2個が北西・南東に約1.6mおいて配されている。本遺跡において検出された配石の中で、2番目に規模が小さいの配石である。掘方や土坑等の、配石下の下部構造は検出されなかった。

遺物：なし。

(12) 12号配石(第10図)

位置：3区の西寄り。7号配石の北西側、8号配石の北側、9号配石の南西側、10号配石の南側に位置する。X=61807、Y=-94780～781。

構成する石の大きさ：長径0.69m、短径0.42m、厚さ0.35m。

所見：上記の規模の北西-南東方向に細長い自然石が1個置かれた状態である。本遺跡において検出された最小規模の配石遺構である。掘方や土坑等の、配石下の下部構造は検出されなかった。

遺物：なし。

(13) 13号配石(第10図)

位置：3区の中央からやや西寄りの南端。調査区南壁際。7号配石の南側に隣接する。X=61794～795、Y=-94769～770。

構成する石の大きさ：長径0.12～0.53m、短径0.05～0.34m、厚さ0.08～0.20m。

所見：東西1.49m、南北0.78mの範囲に10個の大小の自然礫が間隙無くびっしりと纏まった状態で配され、ごく一部では重なって置かれた状態のものも存在している。掘方や土坑等の、配石下の下部構造は検出されなかった。

遺物：なし。

(14) 14号配石(第10図)

位置：2区北西隅小調査区の中央から西寄りの位置。X=61805～806、Y=-94769～770。

構成する石の大きさ：長径0.14～0.56m、短径0.05～0.46m、厚さ0.06～0.20m。

所見：東西4.18m、南北3.26mの範囲に12個の大小の東西に長い楕円形状に配されている。西側で各石の間隔が密で、東側では疎である。掘方や土坑等の、配石下の下部構造は検出されなかった。

遺物：なし。

おわりに

配石遺構とは、周知の通り、自然礫を一定の形状に配置した遺構のことで、計画性をもって大規模に営まれたものとしては、北海道小樽市忍路環状石籬や秋田県鹿角市大湯遺跡環状列石などが著名であり、墳墓や祭祀に関わる遺構とみる考え方が支配的である。墳墓の場合、遺骸を埋葬した墓壇の地表に配石が見られるような事例が多いが、このような場合においては、配石は、墓標的な機能を有していたものと考えられている。主として縄文時代中期末頃から急増し、後期後半に最も盛行すると言われてきたが、前期の大規模な事例も存在している(上野1984)。

本遺跡から検出された14基の配石遺構では、すべての配石遺構について断ち割り調査を実施したが、地山の上に石が置かれただけの状態であり、石の下からは掘方や土坑などは一切検出されなかった。故に、本遺跡から検出された14基の配石遺構は、いずれも墳墓とは考えにくいように思われる。

また、石の配置も規則性が全く感じられず、ランダム

であり、集中せず、散在しているような状態のものが概して多かった。

このような状況であったため、本遺跡で検出された配石遺構を、必ずしも人為的なものとは見做し難く、2021年3月に刊行された発掘調査の報告書において掲載しなかった訳であった。

本遺跡から検出されたこれらの配石遺構の事例が、今後、本遺跡周辺地域において検出された配石遺構を考える上での材料となれば、これに勝る幸いはない。

なお、本遺跡の発掘調査において検出された遺構の種類としては、土坑、ピットの類が非常に多く、これらの重複は顕著な場所もあり、中には調査区内で非常に濃密に分布しているような場所もある。しかしながら、これらの遺構の明確な用途・機能については明らかにし難いものの方が多かった。

本遺跡においては、畑など耕作地としての、あるいは縄文時代と古墳時代後期～平安時代中期の竪穴建物が検出され、居住地としての、それぞれの面における人々の生活の痕跡は跡付けられてはいるものの、本遺跡が、現在も北側を流れる吾妻川によって形成された谷に面した、概して狭隘な場所に立地しており、人々が生活の根拠とした居住地としての集落の中心部は、より安定的に平坦地が確保できる場所に在ったとみられる。

なお、小稿を纏めるに当たっては、当事業団資料部専門調査役谷藤保彦氏に種々ご教示を賜った。記して深甚なる謝意を表する次第である。

引用・参考文献

- 吾妻町教育委員会編1983 『唐堀遺跡』
 吾妻町教育委員会編1985 『郷原遺跡』
 吾妻町教育委員会編1998 『郷原遺跡』
 吾妻町教育委員会編1998 『前畑遺跡』
 吾妻町教育委員会編1998 『生原遺跡』
 吾妻町教育委員会編2006 『町内遺跡』Ⅲ
 岩島村誌編集委員会編1971 『岩島村誌』
 上野佳也1984「配石遺構についての一考察」(『東京大学文学部考古学研究室紀要』3、pp.27～40)
 群馬県史編纂委員会編1988 『群馬県史』資料編1、旧石器・縄文
 群馬県史編纂委員会編1990 『群馬県史』通史編1、原始古代1
 群馬県農政部土地改良課編2003 『土地分類基本調査中之条』
 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団編2005 『久々戸遺跡(2)・中棚遺跡(2)・西ノ上遺跡・上郷A遺跡』
 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団編2006 『上郷B・廣石A・二反沢遺跡』
 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団編2007 『上郷岡原遺跡』
 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団編2008 『上郷岡原遺跡(2)』
 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団編2008 『上ノ平I遺跡(1)』
 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団編2008 『上郷西遺跡』
 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団編2009 『細谷B遺跡』
 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団編2009 『上郷A遺跡(2)』
 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団編2009 『上郷岡原遺跡(3)』
 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団編2014～20 『年報』33～39
 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団編2017 『唐堀B遺跡』
 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団編2017 『厚田中村遺跡』
 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団編2020 『四戸遺跡』
 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団編2021 『唐堀遺跡(1)』
 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団編2021 『唐堀C遺跡』
 原町誌編纂委員会編1960 『原町誌』
 東吾妻町教育委員会編2011 『上郷遺跡』
 東吾妻町教育委員会編2012 『細谷遺跡』
 マッピングぐんま・遺跡まっぷ
<http://mapping-gunma.pref.gunma.jp/pref-gunma-iseki/Portal>

第1表 唐堀C遺跡配石遺構出土遺物観察表

| 挿図 PL.No. | No. | 種類 器種 | 出土位置 残存率 | 計測値 | | | | 胎土 / 焼成 / 色調 石材・素材等 | 成形・整形の特徴 | 備考 |
|--------------|-----|------------|---------------|--------|------------------|--------|-------------------|------------------------|---|------------------|
| 第10図 | 1 | 石器 石皿 | 1号配石 完形 | 長 幅 | 28.1 19.6 | 厚 重 | 6.7 5405.6 | 粗粒輝石安山岩 | 表面の全面が平坦で滑らかである。全体的に自然面と判断され亜角礫を利用する。 | 縄文時代 |
| 第10図 | 2 | 石器 石皿 | 2号配石 約1/2片 | 長 幅 | (13.1) (19.4) | 厚 重 | (8.3) 3237.8 | 粗粒輝石安山岩 | 表面の中央に非常に滑かな部分が認められる。全体的に自然面と判断され円礫を利用する。 | 縄文時代 |
| 第10図 | 3 | 石器 磨製石斧 | 2号配石 完形 | 長 幅 | 11.1 6.1 | 厚 重 | 2.2 240.1 | 変質蛇紋岩 | 全体的に丁寧に研磨整形されておりわずかに光沢がある。部分的に製作時の研磨単位と考えられる稜線状の高まりがあり、全体的に多方向の線条痕が認められる。表裏面の先端刃部には先端方向からの剥離痕が認められる。刃部形態は片刃である。 | 縄文時代 |
| 第10図 | 4 | 石器 磨石 | 3号配石 完形 | 長 幅 | 10.4 9.4 | 厚 重 | 3.6 549.2 | 粗粒輝石安山岩 | 表面のほぼ全体と裏面の中央付近に磨面が認められる。 | 縄文時代 |
| 第10図 | 5 | 石器 磨石 | 3号配石 約1/2片 | 長 幅 | (6.4) (9.4) | 厚 重 | 3.7 299.8 | 粗粒輝石安山岩 | 表裏面のほぼ全体に磨面が認められる。表面の中央付近に敲打痕が認められる。 | 縄文時代 |
| 第10図 | 6 | 石器 石皿 | 3号配石 端部一部欠 | 長 幅 | (29.1) (25.5) | 厚 重 | (12.5) 14200.0 | 粗粒輝石安山岩 | 表面の中央付近に平坦で滑らかな部分が認められる。表面から側面部にかけては自然面であり大形円礫を利用する。側面部から裏面全体にかけては表層的な剥落痕が認められこの形態で機能した可能性がある。 | 縄文時代 |
| 第10図 | 7 | 石器 石皿 | 3号配石 完形 | 長 幅 | 46.4 27.8 | 厚 重 | 12.6 22200.0 | 粗粒輝石安山岩 | 表面は中央がわずかに窪んだ形態であり左半部に滑らかな部分が認められる。側面から裏面にかけては全体的に自然面と判断され扁平な大形円礫を利用する。 | 縄文時代 |
| 第10図 | 8 | 石器 石皿 | 6号配石 完形 | 長 幅 | 34.5 27.6 | 厚 重 | 10.4 13500.0 | 粗粒輝石安山岩 | 表裏面の上方に平坦で滑らかな部分が認められる。表面には表層的な剥落痕が散在しており敲打されることにより生じた可能性がある。全体的に自然面であり扁平な大形円礫を利用する。 | 縄文時代 |
| 第10図 | 9 | 縄文土器 深鉢 | 7号配石 口縁部片 | | | | | 粗砂、白色粒/黒褐/良好 | 波状口縁で口縁が内折する。口縁に沿って3条の浮線を貼付し、間隙に弧状の浮線を貼付する。 | 縄文時代前期中 葉諸磯b式 |
| 第10図 | 10 | 石器 磨石 | 7号配石 完形 | 長 幅 | 11.6 7.0 | 厚 重 | 4.6 501.2 | 粗粒輝石安山岩 | 表裏面の全体に磨面が認められる。 | 縄文時代 |
| 第10図 | 11 | 石器 石皿 | 7号配石 完形 | 長 幅 | 32.2 24.3 | 厚 重 | 10.1 11300.0 | 粗粒輝石安山岩 | 表面の中央から上方にかけて滑らかな部分が認められる。全体的に自然面と判断され扁平な円礫を利用する。 | 縄文時代 |

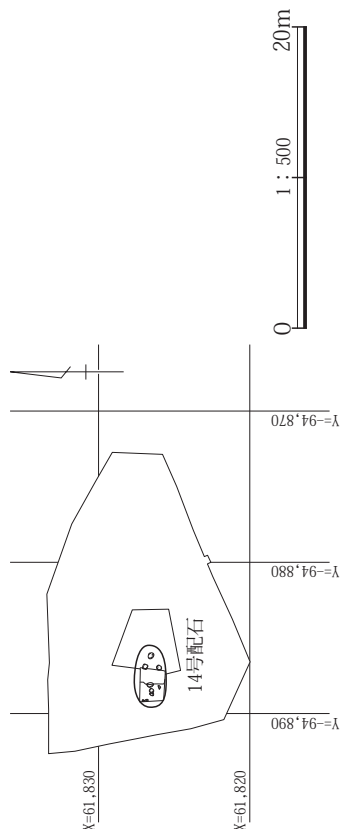


遺跡の位置(国土地理院1/200,000地勢図「長野」平成24年 5月1日を加工)

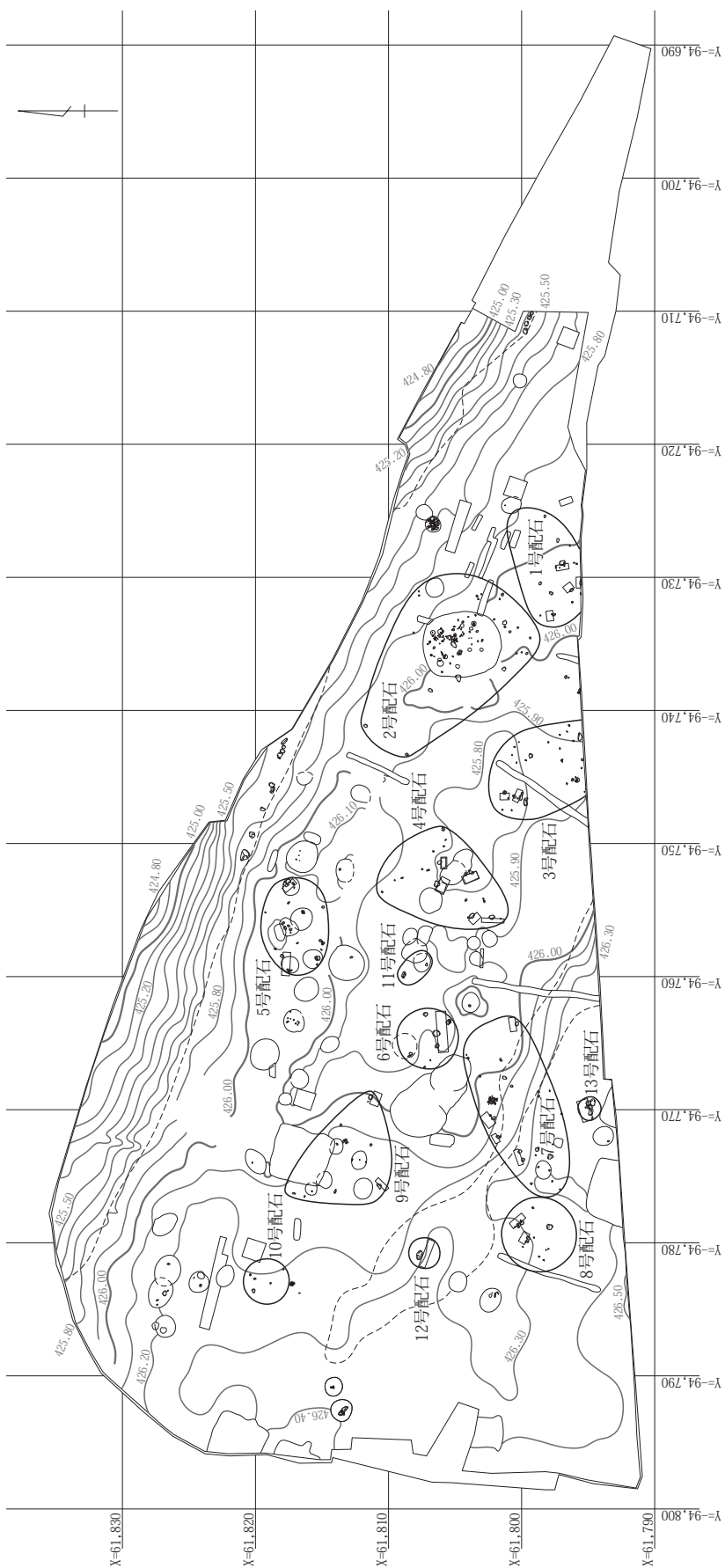


第1図 唐堀C遺跡の位置と調査区

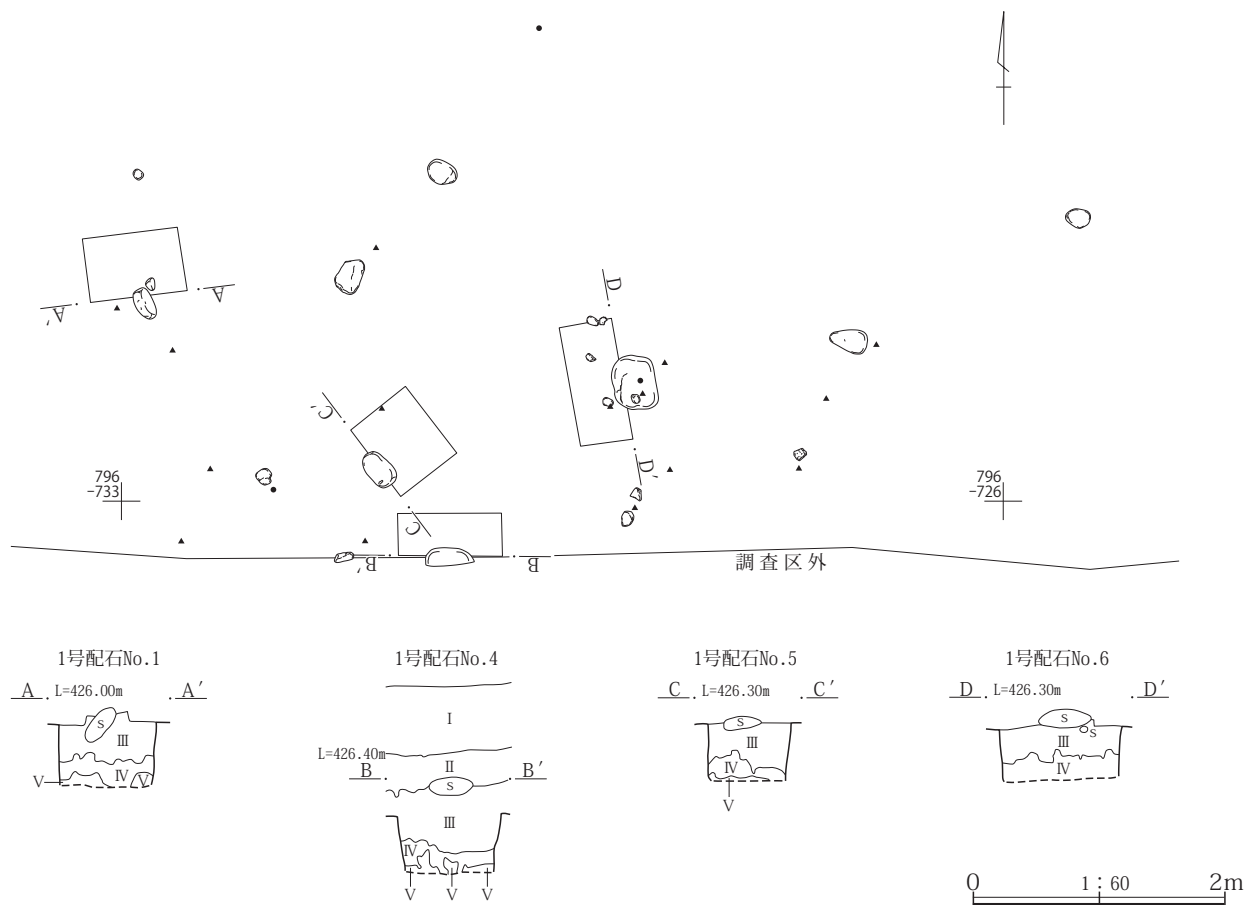
2区2面



3区2面

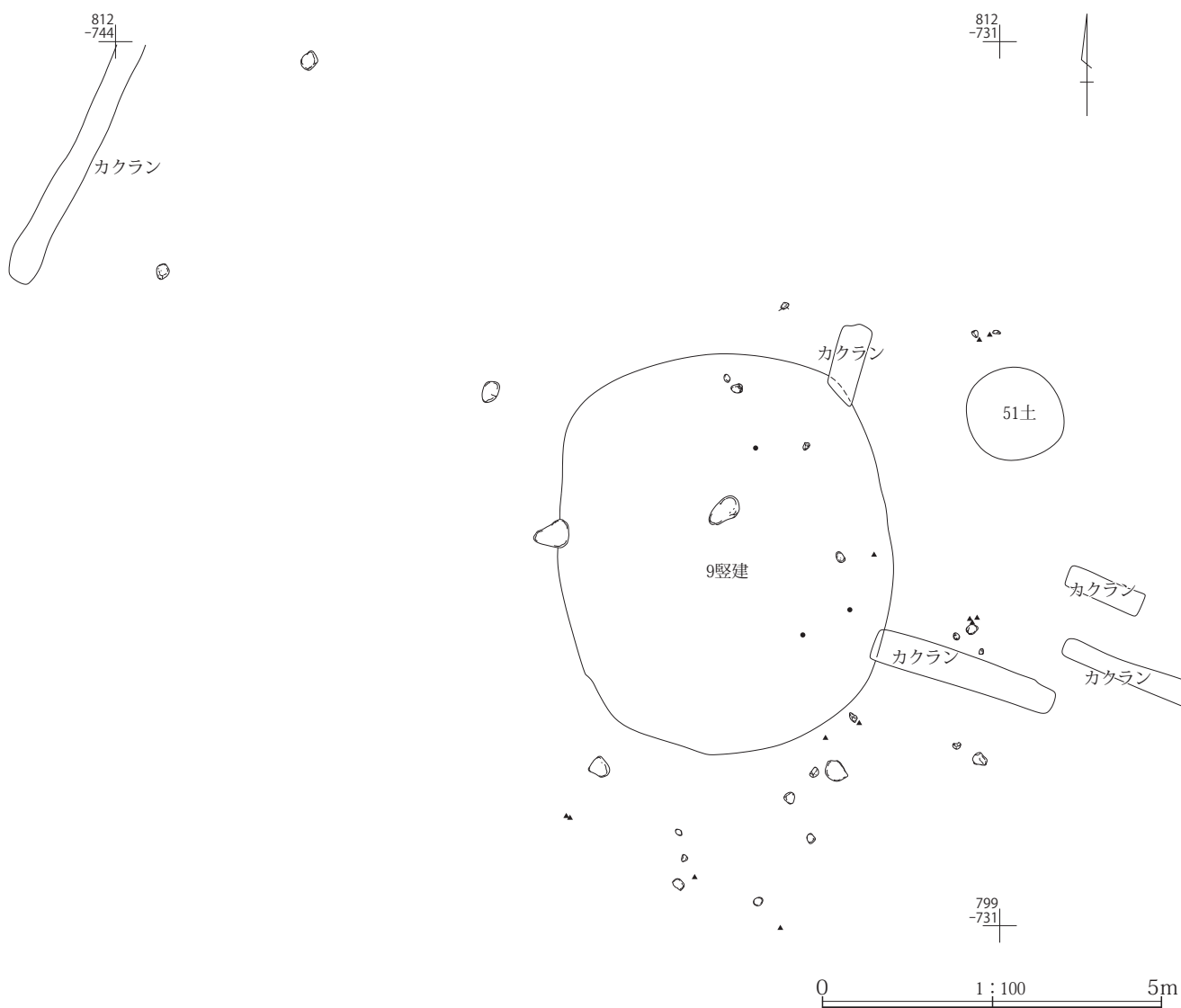


第2図 唐堀C遺跡配石遺構位置図

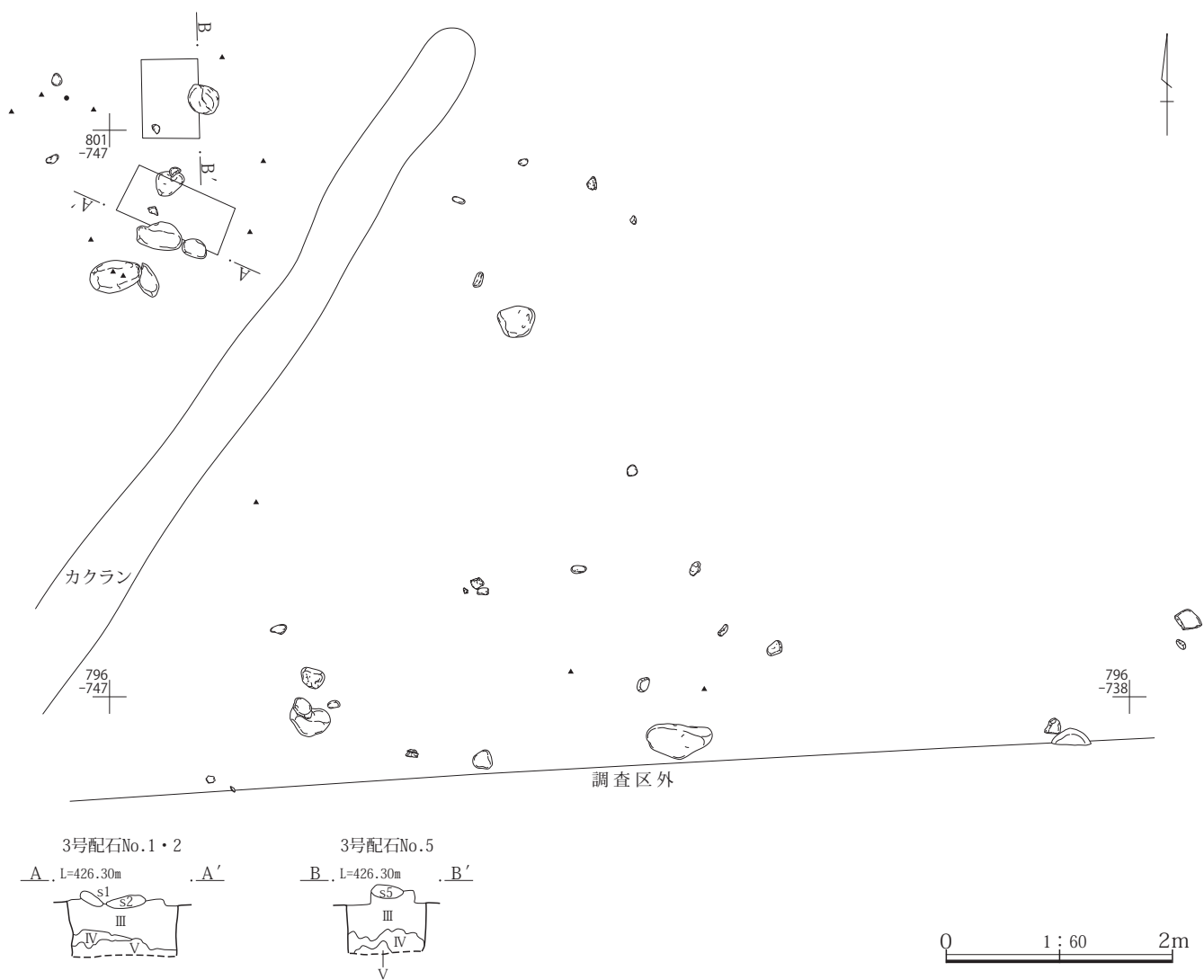


唐堀 C 遺跡 1～14号陪石共通土層注記
 II 黑色土
 III 縄文包含層
 IV 漸移層
 V ローム

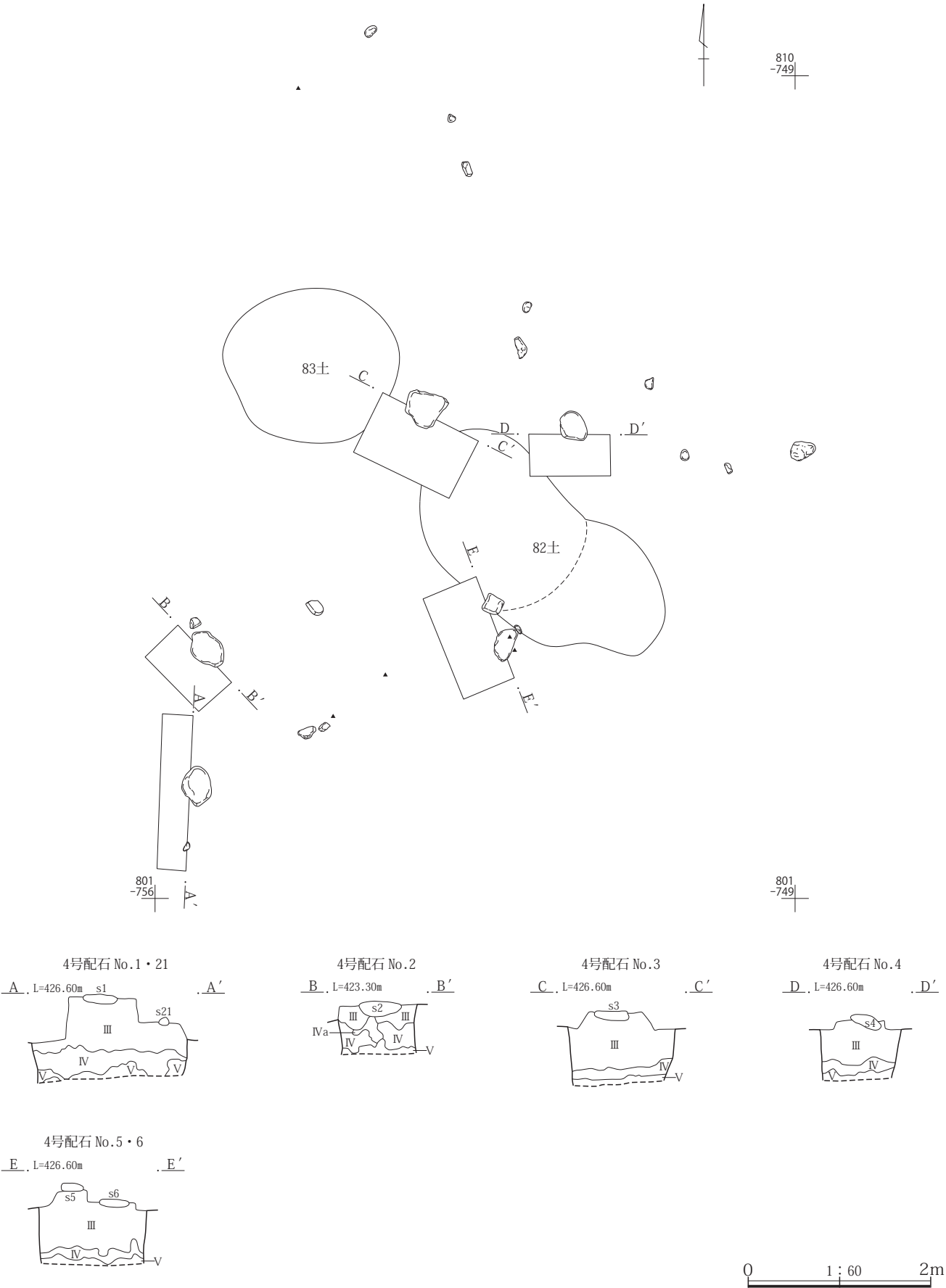
第3図 1号陪石遺構



第4図 2号配石遺構

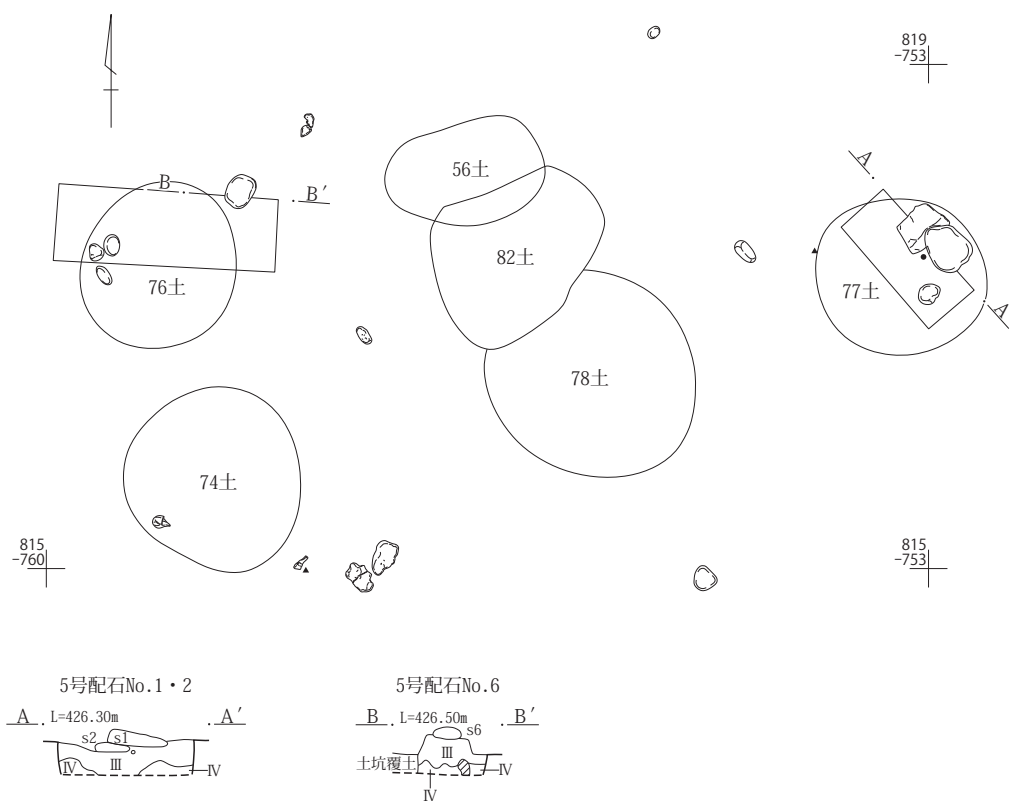


第5図 3号配石遺構

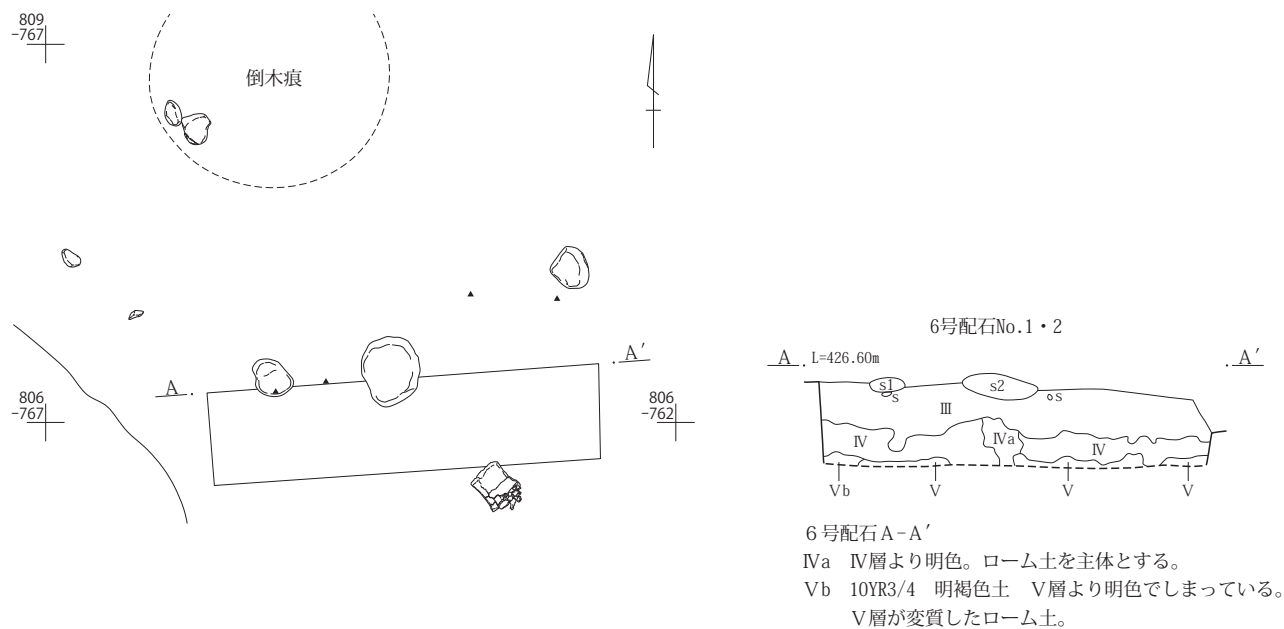


第6図 4号陪石遺構

5号配石

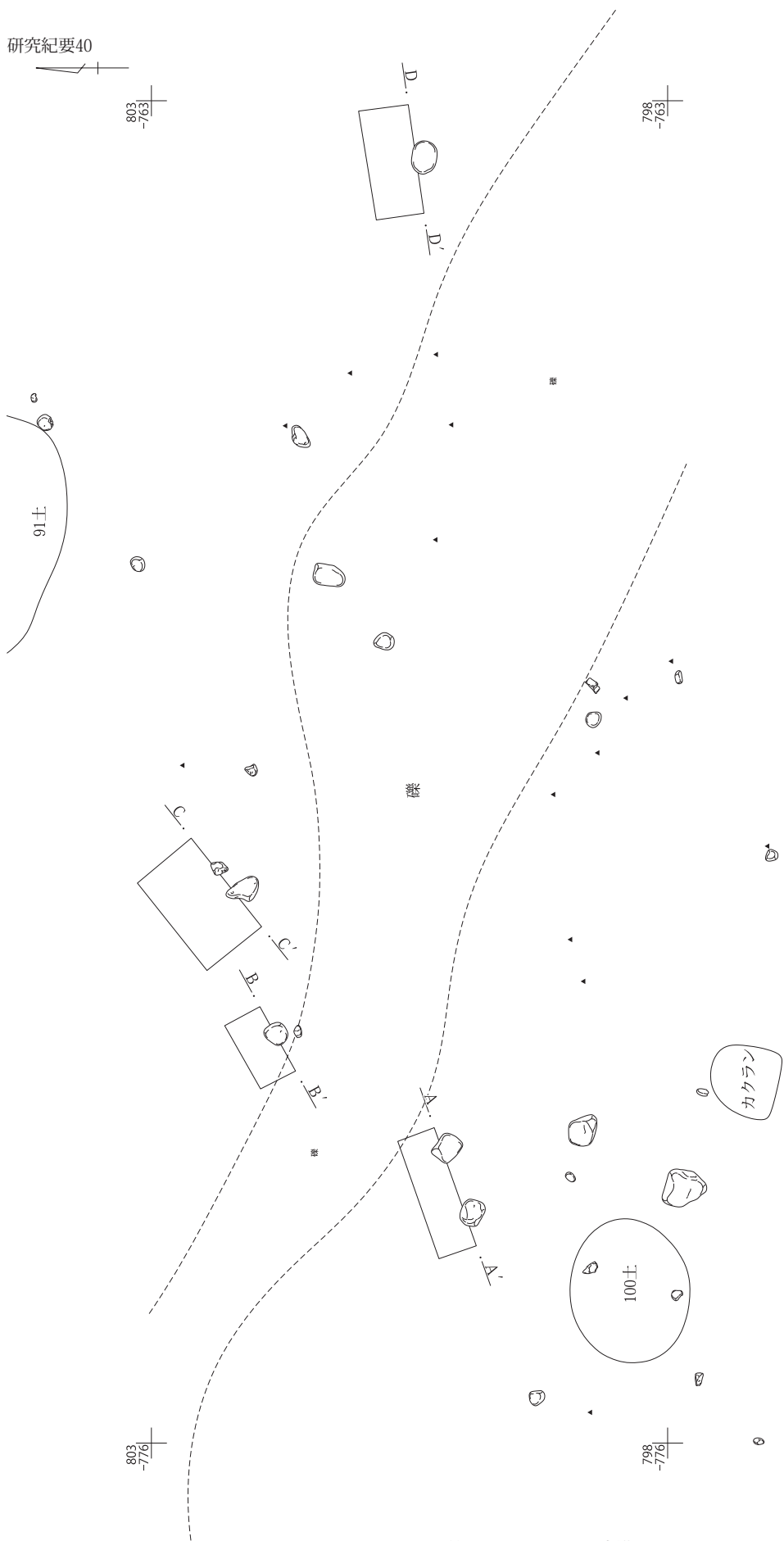


6号配石

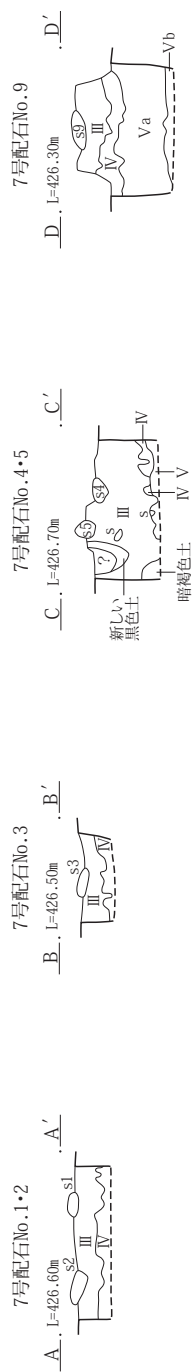


第7図 5・6号配石遺構

0 1 : 60 2m



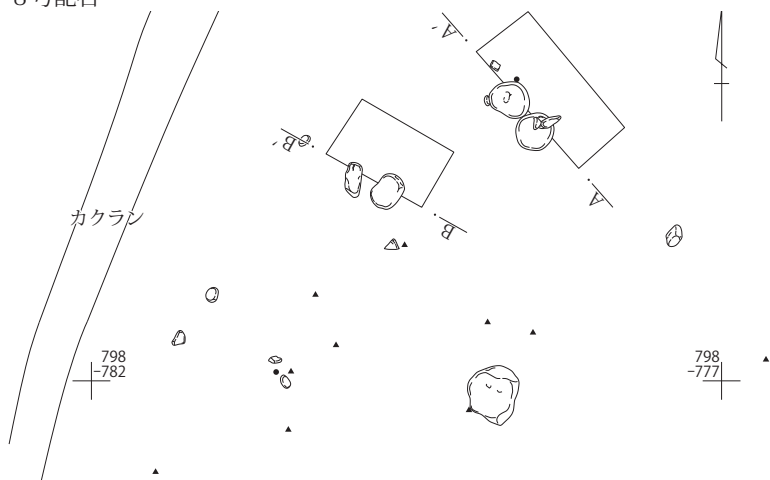
第8図 7号配石遺構



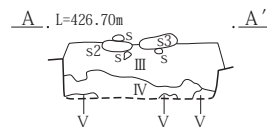
7号配石D-D'
 Va 10YR3/4 暗褐色ローム 粘性に富む。
 Vb 10YR4/4 褐色ローム やや砂質。

0 1 : 60 2m

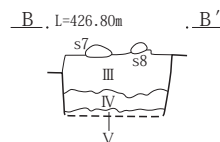
8号配石



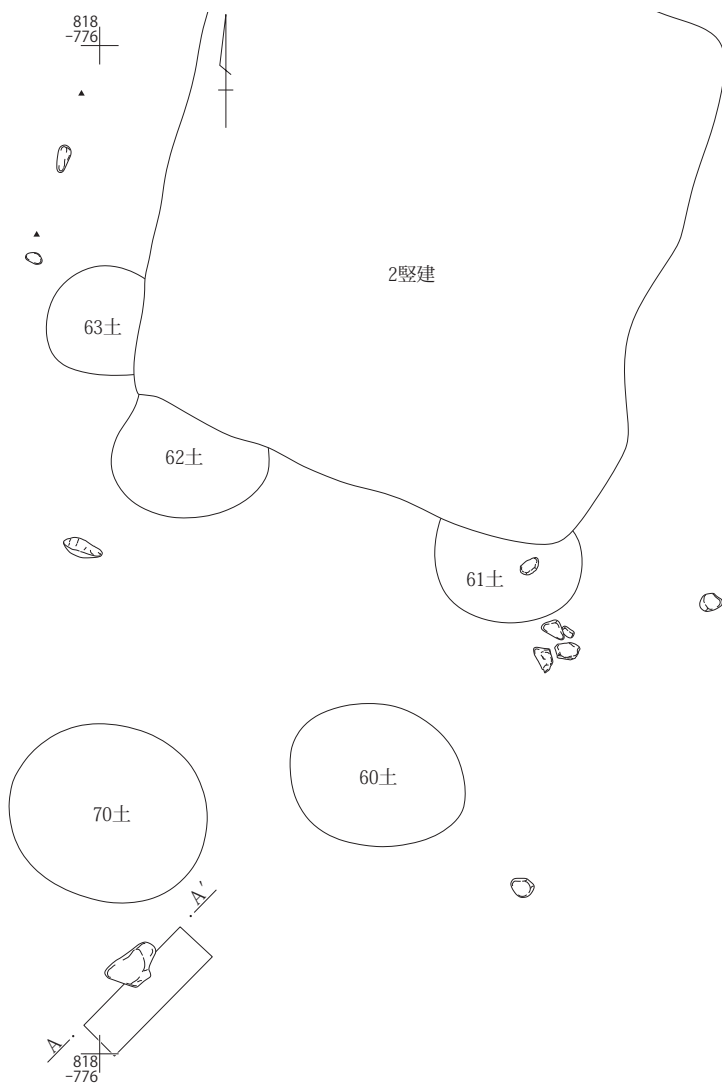
8号配石No.2・3



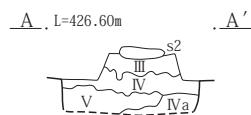
8号配石No.7・8



9号配石



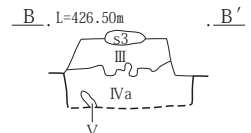
9号配石No.2



9号配石 A-A'

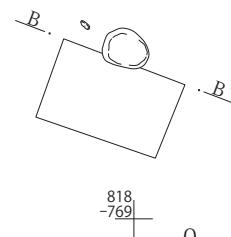
IVa IV層に近いがロームの含有少なく、IV層より暗色。

9号配石No.3



9号配石 B-B'

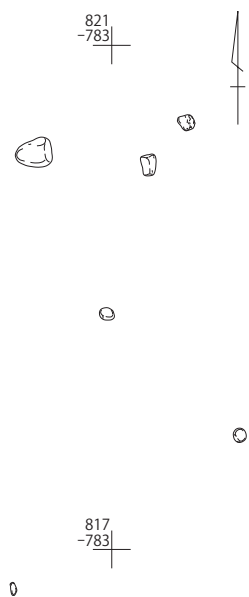
IVa ロームの含有少なく、暗色で、しまり強い。



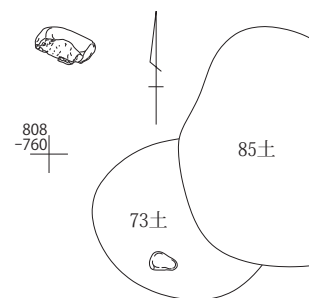
0 1 : 60 2m

第9図 8・9号配石遺構

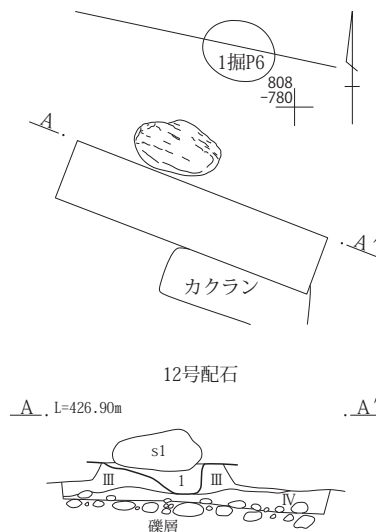
10号配石



11号配石



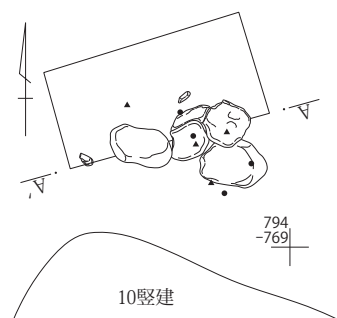
12号配石



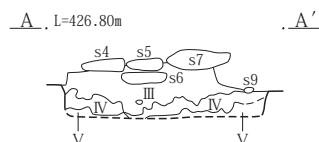
12号配石

- 1 10YR2/2 黒褐色土 ϕ 2～20mmのパミスを多量に含む。
1面土坑等の①層と同じ土。

13号配石



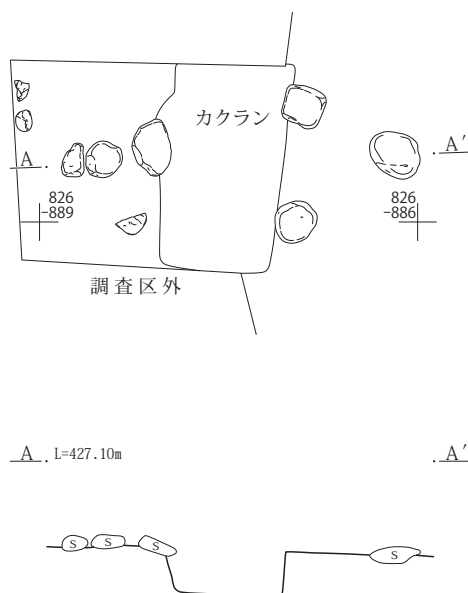
13号配石



13号配石

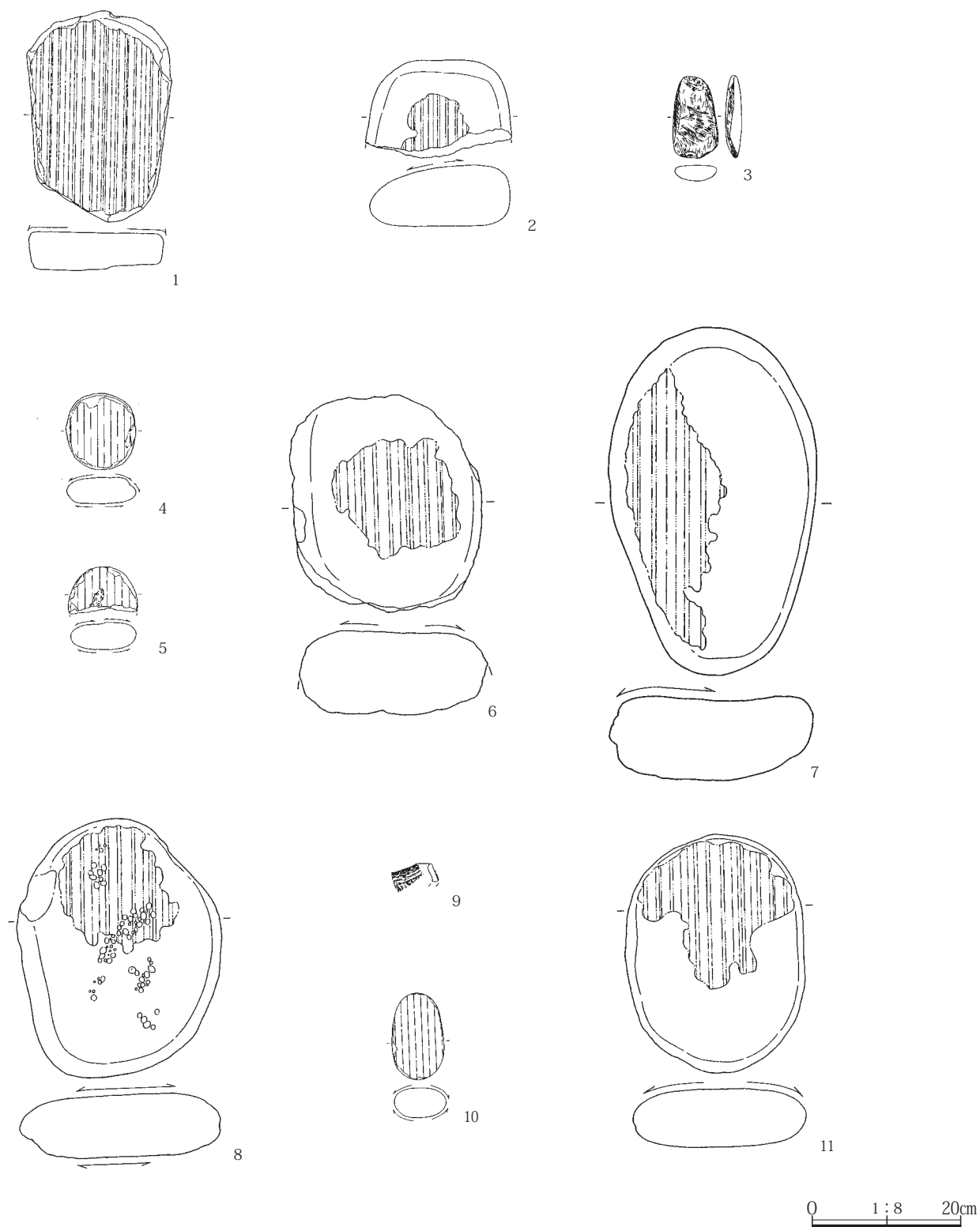
- IV 10YR5/8 黄褐色砂質ローム 礫層表面が一部で覗く。

14号配石



0 1 : 60 2m

第10図 10～14号配石遺構



第11図 出土遺物



1. 1号配石遺構(北から)



2. 2号配石遺構(北東から)



3. 3号配石遺構(西から)



4. 4号配石遺構(東から)



5. 5号配石遺構(西から)



6. 6号配石遺構(南から)



7. 8号配石遺構(北から)



8. 11号配石遺構(北から)